

しゃりん

18

2008/11



過去から私に、私から未来へ

目次

contents

教区教化委員会の今後の予定／教区出版物のご紹介	3
教区教化委員会ニュース	4
インタビュー 森達也さんに聞く②	6
御遠忌ニュース	10
ちよっといこか／しゃらりんちゃん	12

一年分の『しゃらりん』の保存活用と、教区テーマ・サブテーマのさらなる周知を願い、今号に「特別付録」として、オリジナルクリアファイルを作製しました。

書 相馬 方行

第17組蓮信寺。1963年生まれ。
書家。毎日書道会会員。

教区教化委員会の今後の予定

【聖典講座】

「源信の『往生要集』を読む」(第2回目)

日時：11月14日(金) 午後6時～

会場：教区教化センター会館 研修室

講師：ロバート・ローズ氏(大谷大学教授)

「死刑制度に問う」

日時：12月17日(水) 午後6時～

会場：難波別院同朋会館 講堂

講師：森達也氏(ドキュメンタリー映画監督)

「親鸞の思想」

『教行信証』『化身土巻』に学ぶ

第1回

日時：2月23日(月) 午後6時～

会場：難波別院同朋会館 講堂

講師：藤場俊基氏(金沢教区 常讃寺)

第2回

日時：4月14日(火) 午後6時～

会場：教区教化センター会館 研修室

講師：藤場俊基氏(金沢教区 常讃寺)

【ボランティア講座】

「家族はつくるもの」里親運動を通して

日時：12月10日(水) 午後6時～

会場：教区教化センター会館 研修室

講師：伊東憲秀氏(第1組順教寺)

【秋安居】

『顕浄土真仏土文類』窃以―迷失せる恩徳―

(難波別院会場)

日時：1月14日(水)・15日(木)

午後5時～午後8時半

会場：難波別院同朋会館 講堂

講師：鍵主良敬氏(講師・大谷大学名誉教授)

(大和大谷別院会場)

日時：1月16日(金)

午前10時～午後3時

会場：大和大谷別院

講師：鍵主良敬氏(講師・大谷大学名誉教授)

【戦争展】

期間：3月4日(水)～4月5日(日)

会場：教区教化センター会館 研修室

【得度準備講習会】

日時：3月25日(水)～27日(金)

会場：難波別院同朋会館 講堂他



教区出版物のご紹介

『うまれてよかったね』

―若者へのメッセージ―

本書は、青少年の方を対象に、その世代の親や大学教授の寄稿文等が収載されています。また、大阪教区の青少年団体も編集に参加しており、各団体の活動の紹介や、青少年ならではの視点が豊富に取り込まれています。

23頁 定価100円

※100冊以上は、1割引にてお取り扱いさせていただきます。

『真宗大谷派儀式作法の心得』

本書は、儀式を執行するにあたり基本的な作法を紙幅の許す限り取り上げたものです。

32頁 定価300円

『亡き人とのあらたな出会い 葬儀後の仏事』

お焼香の仕方や年忌の数え方等を収載しており、葬儀の後や中陰のお参りの際にご活用いただける内容となっています。

3折リーフレット 定価20円

お求めの際は、大阪教務所までご連絡ください。



教区教化委員会ニュース

推進員養成講座実施組のご紹介

去る2008年9月4日に推進員養成講座を修了されました第20組と、9月6日に第1回目の推進員養成講座の本講座が始まった第21組のスタッフの方に、一言いただきました。

第20組

新推進員の方々は、この10月中旬に組の推進員全体学習会に初めて合流されました。当日は雨天にも拘わらず、新推進員の多くの参加を前にして、喜びながらもこのご縁を相続していくべき責任を実感しています。

講座に参加された方々が、お手継ぎのご住職から誘われた時の内心の思いは、一様ではなかったでしょう。既に聞法場に親しまれておられる方から、義理参加、知人も行くので連れ持ったの参加……等。

しかし、一年余に亘り講義・座談・上山と、足を運ばれ身を置かれた事実は当に平等な法縁成就であり、しかもお一人お一人の人生の業縁の一大事であったことには違



いありません。上山の際の正信偈唱和・宣誓文朗読の際の感涙を、多くの方の目に見ました。宗祖の言われる「はじめてはから

わざるころ」(『尊号真像銘文』)との出遇いであったと頷いております。

改めて日々の経過の中で、初一念に還る聴聞の場のご縁作りに勤しみたいと思っています。(第20組組長・由上義孝さん)

第21組

推進員養成講座は、受講者の「推進員」誕生だけが目的ではありません。スタッフ(「寺族」・門徒)や講座に関わった人すべてが、それぞれの場で真宗の教を伝えることができるように、これが第21組第2期推進員養成講座の出発点です。

そこで、第21組では、今年の春から推進員養成講座の運営・内容等について組のスタッフで鋭意協議が重ねられてきました。テーマについては、スタッフ自身がもう一度本当の真宗を学び、確かめることを願いとし「なむあみだぶつと私」となりました。また、前期教習の日程の中では、難波別院でも研修することを計画しており、平和・戦争・人権について学習を実施する予定です。

そのほか日程内には、受講者の方々に楽しみながら学んでいただきたいという願いから、仏教讃歌の練習や、若手「寺族」による人形劇なども行う計画をしております。



そして、講師の沖野頼信先生(第7組本照寺)からは、「この講座を一般の方々にも周知してもらえないだろうか」という助言をいただき、第1回目は(2008年9月6日開催)講座の内容をDVDに録画し、組内寺院に配布したことであります。

今後も「寺族」、すでに推進員になっておられる方を中心にスタッフでいろいろな案を出し合いながら充実した推進員養成講座となるよう検討していきたいと思えます。

(第21組光浄寺・北畠顯信さん)

第13組が「帰敬式執行に

関する講習会」を開催

去る、10月2日、教区教化委員会「儀式・法要部」主催の「帰敬式執行に関する講習会」が、第13組（山田武司組長）の即念寺を会所として開催されました。当日は、「帰敬式執行に関する実行委員」の間俊道氏（第10組善勝寺）・洲崎善範氏（第13組即念寺）・芳原薫氏（第21組因随寺）が講師となり、帰敬式執行の手順を丁寧に説明しました。その後、受講者の馬場裕典氏（第13組西方

帰敬式の講習会を受けて

先般、組で帰敬式執行に関する講習会を受けました。講習会は、教区の「帰敬式執行に関する講習会実行委員」の方々によってご指導いただきました。

帰敬式を執行するにあたり、荘厳や儀式作法のほか準備する内容など参考資料をもとにご説明いただき、実際に装束を着け執行者として実践いたしました。掛役の進行により内陣出仕から剃刀の儀、法名伝達等のご指導を受けながら行いました。やはり、実践することで儀式の流れや作法に注意する点など学ぶことができました。特に掛役が進行者となることを考えると執行者だけでなく、掛役が非常に重要な役割があることを学びました。また、執行者としては中啓の置き方や懐啓するところなど以外にも細かい作法に戸惑うこともありましたが、



剃刀をあてる動作など実践することで理解しやすく学ぶことができました。

今回このような講習会を受けて、まだ執行したことがない私においては、これから寺院で帰敬式が受式いただけるようご門徒の方々に呼びかけていこうという思いが生まれました。

（第13組善福寺・野村正示さん）

◎同講習会は各組の依頼がありましたら、講師が会所に向いて開催いただけます。

その際に、組で準備をしていたきたいお道具は、華籠棚・広蓋・へぎ・剃刀・蘭草履です。

組の教化委員会などでご検討いただき、開催が決定しましたら、組長を通じて教務所までご連絡ください。

教区声明講習会が始まりました

去る9月17日・10月2日、教区教化委員会「儀式・法要部」主催の「教区声明講習会」が、難波別院の本堂北広間を会場に開催されました。同講習会は僧侶としての儀式執行に必要な基本的要件を整えることを目指し、教区内の僧侶を対象に年度内10回開かれます。第1回目と第2回目は「正信偈」真四句目下についてのお稽古がなされ、

受講者たちは熱心に研鑽を深めました。今後も引き続き、「正信偈」草四句目下、「念仏和讃」五淘・三淘、「三部経」、「伽陀」、また「日常の荘厳とお給仕」などについての講習が行われる予定です。



聞き手Ⅱ宮部渡・戸次公正
構成Ⅱしゃりん編集部

森達也さんに 聞く②

セキュリティの上昇

森 国内的にはオウムによって、世界的には9・11以降、危機管理意識が拡がって、他者が怖くなった。でも考えたらオウム以降、国内でテロがあったかという、1件もないんですよ。でもみんなずっと怯えているんですよ。その結果監視カメラもどんどん増えて、安心できるかというと、逆にもっともつと不安になってしまふ。

メディアはそれを煽ります。メディアは部数や、視聴率を追う過程で、それを煽る構造になるんです。これはメディアは無意識にやっています。危

ない怖いと、購買意欲をかきたてるんです。視聴率が上がるんですよ。その結果、どんどんセキュリティが上がる。みんな不安でしょうがない。

今、道行く人に「治安は悪くなっていると思いますか」って聞くと、十人中九人は「いやもう物騒だねえ」って言うと思うんですけど、では実際にどうかというと、戦後日本でいちばん殺人事件が多かったのは、1954年で3081件です。2007年は1199件です。人口は増えてますから、殺人事件はもう三分の一以下に減っているといえます。少年の犯罪が凶暴になったっていうのも嘘です。むしろ戦前のほうがよっぽど凶暴

だった。でも体感治安は下がっているんです。怖い危ないが強くなってしまつて、その結果他人に対しての不寛容さがどんどん強くなってきている。

宮部 朝日新聞に「サザエさんを探して」という、昔の『サザエさん』を紹介しながらこの時代はこうだったということ語るコーナーで、四十五、六年前の『サザエさん』が、少年犯罪が怖いということをテーマにしていました。波平がカツオにゴマすってるんですよ。なぜゴマすてるのかというと、新聞に「少年犯罪多発！」と



森達也

1956年、広島県生まれ。映画監督、作家。
1998年、オウムの現役信者に取材した自主制作ドキュメンタリー映画『A』を発表。
著書に『「A」ーマスコミが報道しなかったオウムの素顔』、『死刑』などがある。

書いているのがオチなんですよ。

森 2000年に少年法が変わりました。少年の事件が多発し凶悪化しているという虚妄の幻想が、政治を変え法律を変えたわけで、とても怖いことですよね。厳罰化も進んでいます。1991年から1995年までの5年間で、2001年から2005年までの5年間で、地裁の死刑判決は3倍になってるんですよ。ものすごい勢いで増えますよね。

でも世界的にどうかというと、もちろんテロ対策、セキュリティは上がってますけど、死刑はというと、どんどん死刑廃止の国が増えてますからね。日本だけが増えているんですよ。

だからぼくはずっと日本全体がオウム化しつつあるっていう言い方をしてるんです。仮想敵が欲しくなる。怖いから。

宮部 わたしがPTAの役員をしていた時に「パトロール中」という自転車の前のカゴに付けるプレートが大流行しました。それは実際に危ないという思いもあるんですけども、煽られて煽られて、あれがものすごく流行りましたね。

それと気になるのは、あのプレートもどこかの市がやり出して流行ったと。そうしたら当時大阪中でのあのプレートを付けて走っていたんですよ。

シリンダー
●
聞く

森 そういった状況でより不安や恐怖が煽られるのと同時に、わかりやすい恐怖ばかりが喧伝されて、

もつと本質的な危険な因子がどんどん不可視化されてしまう。その危険性もありますよね。

宮部 イラク戦争だつて大量破壊兵器があるといつて始まったのになかった。じゃあなかったというそのことについての検証はあまりなされない。

森 そうですよ。ベトナム戦争もトンキン湾事件という謀略で始まったわけですね。それをニューヨークタイムズがすっぱぬいた。そもそも北爆の背景にあったのは、共産主義は際限なく隣国に感染するというドミノ理論でした。まったくの空論です。だから国内外の世論が撤退を主張して、アメリカは敗北しました。イラク戦争も構造は近い。大量破壊兵器もなかったし、フセイン政権とアルカイダとの結びつきなどどこにもなかった。ところがアメリカを批判する民意が、一部だけで大きくは立ち上がってこない。

宮部 こないですね。

森 おかしいねって言いながらも、みんな鈍感になっちゃってる。この理由のひとつはメディアだと思います。進化しすぎちゃったんです。

宮部 進化しすぎた？

森 ベトナム戦争を伝えたメディアは写真です。例えば沢田教一が撮った川を逃げる母と娘の難民

の写真とかね。この写真を見て何を思うのかというと、この母子はこのあとどうなったんだろうとか、このフレームの外になにがあるんだろうとか。つまり写真というのは情報量が少ないから、いろんなものを掻きたてるんですよ。その結果、他人事じゃなくなってしまう。

ところが今はビデオです。米軍がバクダッドに侵攻した時には、従軍記者や取材クルーによつて撮られた戦場の映像が、ニュースで当たり前のように流され続けました。その結果、逆にイマジネーションが湧いてこなくなってしまう。能動性がなくなってしまう。ただ受けとるだけになる。そうすると他人事になっちゃうんです。

メディアが進化することでみんなが鈍感になってしまった。とても怖いことです。メディアが進化すれば世界の平和や貧困の格差は正などが実現すると思っていだら逆だった。その状況に今ぼくらは来てるってことです。

宮部 若い人たちとのざつくばらんな話の時に、よく出てくるのが「外国から攻められたらやつぱり攻め返すやろ」。ほんとに短絡的ですよ。それは殴られたら殴るのと一緒やで」って言っても、「首絞められたらやつぱり首絞め返すやろ」みたいな話で終わってしまう。そういう意識はわたしたちの中にもあるんでしょうけれど。

森 20世紀以降、殴られて始まる戦争ってあまりないんです。殴られそうになったと思って先に殴れっていう戦争がほとんどです。お互いそうなん

です。お互い先手必勝で、やられる前にやるで氣づいたら殴り合ってる。たしかに先にどっちかが手を出してるんでしょうけど、それ以前の過程の中で、こいつにやられるっていうセキユリティがどんだん上がっているということがあります

日本もそうですよね。石油を止められて、ハルノートを突きつけられて、もう日本は滅びると思ったわけでしょ。アメリカはアメリカで日本は危ないぞと思ったわけです。そういった形の中で戦争って始まるわけで、本当はもうちょっと違う対処があるんでしょうけど、どうしても人間っていうのはそうなるともう一色になっちゃうんでしょうね。

保守化右傾化ってみんな言いますけど、ぼくはちよつと違うと思うんです。セキユリティ強化だと思っんですよ。でもその結果、右傾化してるかのように振る舞ってしまうんですね。民族主義であるかのように見えるんですよ。みんな怖いから、まとまろうとするんですね。

だからこれは無意識的には戦時体制ですよ。

死刑

戸次『死刑』をじっくり読ませていただきました。すごい本です。自分自身が死刑廃止の運動に関わってきた歩みを巡って考えさせられるような思いで読ませてもらいました。

やはり死刑の問題はわたしたち真宗にとって、避けられない。親鸞や法然は流罪になり、住蓮・

安樂ら4名は死罪になったわけですからね。念仏の教えを説いたことが流罪・死罪につながったという歴史がわたしたちの背景にあるわけです。

この本を読んで、もうひとつ考えさせられたのは、裁きと許しという思想があると書かれていました。裁く一方で許す。でもわたしたちは死刑という刑罰を究極刑として与える。なぜ人は人を裁き、罰して死刑にまでするんだろうかと。

仏教の中にも地獄と極楽の思想、因果応報という形で死刑の文化を支えてきたものがあるのではないかという気がしています。

森 あるでしょうね。

戸次 本にはなつたけれども、今後この死刑の問題は森さんの中でどう引きずっていかれるんでしょうか。

森 きつかけになったのはオウムの死刑判決を受けている人たちへの面会でした。つまりずっと他人事であつた死刑というものが、ぼくの前で実体化しているわけです。アクリル板越しにしゃべって笑っているこの人がいずれ死刑になるっていうのはなんだろうと、そこから始まったわけです。本は終わりましたが、当然面会は続いているわけです。いずれ死刑が確定すると彼らには会えなくなってしまう。それは実際に文通できるかどうかは別にして交流は続けていきたいですし、だからぼくにとっては死刑の問題は終わらない。死刑制度がある限りは。

この本の中でもさんざん悩みましたけど、結論としては三段論法になってるんですよ。論理的には死刑制度は絶対に整合性はないんですね。すると残るのは感情・情緒です。被害者の応報感情もあるし、もつと大きいのは実は、悪を絶対に罰する究極的な制度がどこかに存在してほしいというぼくらの不安と願ひなんです。その情緒にも分け入ってみて、自分なりに気づいたんですが、普段ぼくらが思う以上に人って利他心があるんですね。つまり目の前で今死にかけている人がいたら、誰もが救おうと思う。同じことですよ。そう考えればいいわけで、今日の前にいるこの人はもうすぐ殺される。ぼくはそれを救いたい。それでいいじゃないかと。人間というのは、かわいそうだという情緒が発生する前に、もつと反射的にそういった部分があるはずなんです。それを普通に受けば、死刑はどう考えても、自分にとっては意味がない、あつてはいけない制度なので、それは結論ですからたぶん揺るぎません。

戸次 被害者感情とどう向き合うかですよ。いつ私たちも縁があれば加害者にも被害者にもなるかわからない中で、人間のそういう愛憎矛盾する心、人を憎んだり恨んだり報復したりしたくなるような、また国家の死刑というものを求めるような感情と、森さんはどう付き合っておられるのでしょうか？

森 当事者と非当事者を同じ地平に置くのは無理なんですよ。それはもう絶対ぼくにはわからない

い。とはいえ突き放していいものでもない。

非当事者はよく死んで償えと、人を殺したら何をやっても償えない。それほど取り返しのつかないことなんです。その取り返しのつかないことをやったらこうなるという見せしめのために、なぜまた取り返しのつかないことをしなくてはならないのか。僕にはそれがわからない。本村さん（註・光市の母子殺害事件の遺族）と何度かメールのやりとりをして、一部の文章は本に引用させてもらって、まだできあがった本もお送りしました。そのお礼のメールを送ってきたくれました。死刑制度は望まないけれども、あの少年には死んで欲しい、それは変わらないと。たぶん少年が処刑されたその日から修羅が始まるであろうというようなことを書いています。もうひとつ、もしも森さんが誰かに殺されたら、自分はその殺した人間を憎むし、死刑にして欲しいと思うって書いてるんですね。それは同じ事で、ぼくは死刑囚に会って、話をして、彼には死んで欲しくないって思う。人はやっぱりそういう生き物なんですよね。誰と出会うかっていうのは限定されますけど、すべてに出会える可能性を人は持っているわけですよ。であれば、死んで欲しくないんですよ。当たり前のことですよ。本村さんはぼくが殺されたら、そいつを殺したいと思う。でもそいつと本村さんが会えば、あなたももしかしたら変わるかもしれないっていうような返事を書きました。たぶん人間ってというのは本来そういう生き物だと思っし、そこはもう信じるしかないですね。

最後に

宮部 最後に森さんに感想を尋ねたいと思ってることがあるんですが、ここ数年、真宗と関係をお持ちになつていますよね。

わたしたちの宗門の中で、例えば先の戦争で、これほど親鸞の教えをいただきながら、戦争に協力してしまった。あるいは今の死刑制度とか様々な問題に対しても、教えをいただく中でどのように取り組んでいくべきなのか問い直すことが往々にしてあります。

そこで、オウムの中にカメラを持ち込まれた森さんだからお訊ねしたいんですが、宗門関係者に向き合う中で、言いにくいこともあるのかと思いますが、もつとこうしたらいいのとか、せつかくこういう教えの中にあるながらこうじゃないかとか、お感じになることがあるんじゃないかなと思うのですが。

森 仏教の中でまっ先にぼくに声をかけてくれたのは真宗です。お誘いが来たり、実際にお会いして話をする中で、真宗の歴史を少し調べると、ぼくがテーマにしている戦争や部落差別や死刑制度の問題には、ことごとく真宗が関係している。例えばハンセン病問題のときは国家の側に加担しているし、戦争の時には協力している。親鸞でありながらなんで？って思ったこともあったんですね。でも、真宗のもうひとつの特徴は、過ちを実に反省するんです。隠さらないですよ。「こうい

う過ちがありました！」ってみんなで懺悔する。だから森さん来いよ、一緒に語り合ってくれみたいなね。なんだこれはと思ったんだけど、これ、真宗らしさですよ。だから盛大に間違えるんだけど、盛大にそれを軌道修正する。それで、それを隠さない。一生懸命周りにそれを言う。とても振幅の激しい教団ですよ。おもしろいです。

これはある意味でやっぱり親鸞イズムっていうかね、型に嵌らずに。たぶん間違えるものなんですよ人間は。間違えるものなんだと思う。最終的にいい方にいくのだというイズムがどこかで脈々とあるという気はしますよね。あんまりいいことばっかり言っちゃうのもどうかと思うけど。

ぼくは仏教って大事な宗教だなんて最近思い始めています。実は釈迦は来世や輪廻転生などについては一言も触れていないということも含めて、今の世界に対しての哲学的なアプローチがとてめたくさんある。だから一教団でもない一宗派でもない仏教を体現するひとつの思想として、真宗にはがんばっていただきたい。もう充分がんばっていますけどね。

宮部・戸次 今回は率直なお話いただきありがとうございました。

（文責・『しやらりん』編集部）

今年度も、森先生には12月17日（水）午後6時から、聖典講座として「死刑制度に問う」というテーマでお話しいただきますので、ぜひご聴講ください。

大阪教区

御遠忌通信

第17組御遠忌お待ち受け大会

去る9月13日、第17組では、親鸞聖人750回御遠忌お待ち受け大会として、真宗本廟に集い、御影堂御修復の現場見学を行った。

このお待ち受け大会に至るまでに、第17組では数年前より組門徒会研修会を地道に続けてきた。それまでの組門徒会員だけによる研修会という枠を超えて、一般門徒または地域の方々にも声を掛け、東大阪市民会館を会場に年2回開催してきた組門徒会研修会には、毎回100名前後の参加者をもって行われた。その研修会の集大成として「宗祖としての親鸞聖人に遇いたい」という声を中心に地元での大会ではなく、真宗本廟に足を運んでのお待ち受け大会ということになった。そしてまた、第17組にとつて組が大きく1つにまとまっていく大切な

企画でもあった。

大会への参加を呼びかけたところ、380名という大人数の参加者が募られ、バス8台での上山ということになった。住職だけでなく、坊守、青年部、門徒会、一般門徒から30名近くのスタッフを構成し、各号車に分かれてバス内での進行に付いた。往路中のバス内では、事前学習として「お待ち受け前期総集編」DVDを鑑賞しそれぞれに御修復に至るまで、またお待ち受けの取り組みについて学んだ。

本山到着後は視聴覚ホールに集まり、開会の言葉として東弘第17組門徒会長より大会趣旨、また第17組のこれまでの取り組みについての挨拶をし、そして本山より里雄参務に、宗祖としての親鸞聖人に遇う宗門の取り組み、750回御遠忌を迎える意義



集結し、このお待ち受け大会の一つの意義でもある、宗祖としての親鸞聖人に遇うということ、第17組が組としてまとまって行く機会であるということ踏まえて、全員で正信偈同朋奉讃を唱和した。昼食は大寝殿、白書院に分かれ、お斎を頂いた。食前の言葉を唱和して頂いたお斎に、「普段食べることの無いお斎をご本山で頂けることに感激した」との声もあった。大会日程はこれで終了したが、本山出発の時間まで、参加者はそれぞれに涉成園を見学しに行ったり、本山周辺のお店にて自由時間を過ごした。

について大切なお話を頂いた。その後、大屋根見学と諸殿拝観に分かれ本山職員の皆さんのご協力のもと丁寧に説明してもらい、参加者も瓦の上がった大屋根に感嘆の声を上げた。

そして最後に380名全体で阿弥陀堂に

第19組御遠忌お待ち受け大会

4月12日、「リック羽曳野」において、第19組お待ち受け大会が開催されました。式典、歌のコーナー、寸劇、講演と進行了ました。

寸劇は4ヶ月ほど前の準備会で、「寺族」青年を中心にする事が決まり、演題は法事ってなあに?」となりました。法事に集う家族、親族のかかわりや抱えている問題

を組内の「若者組」・「団塊世代組」・「高齢者組」と分けて出し合うことから始まりました。意見が出揃ったところ若者組が全体をまとめましたが、団塊世代組・高齢者組には少し違和感があつたようです。「そんなことは言わない」「そんな風に考えない」との意見があり、それではということ、高齢者組がまとめましたが今度は他の世代からあまりよくないという意見が出ました。

もやもやした雰囲気の中から、まず配役をして個々の表現力と演じる世代からのアドバイスで練っていくということになりました。演者は9人・幕は10幕。練習の中で、幕間効果音を入れ、舞台はセットを考案し、立ち位置や向きなども研究されました。練習には、学生、会社員、主婦それぞれの立



場がいましたから時間あわせが大変でした。それでも役を立てて練習し、遅れて駆けつければ出演する場面を繰り返しました。そのような中で「終わったらどうなるんやろ」「続けてみんなやっていきたい」という声が聞かれました。推進員養成講座と同じでした。

そして当日。幕前の出演者のマイクが外れ、どうなるかと思いましたが相方がうまくフォローをし、参加者から爆笑を誘いました。そのおかげでみんながリラックスし、600人の参加者の前でありましたが、その後順調に演じられました。

最後の場面では親鸞聖人が登場し、みんなが集い学んでいくことの大切さ、来年、第19組では推進員養成講座に取り組むのは非受講して真宗本廟に上山いただきたいというお話がありました。

この大会を縁に、「寺族」青年会が発足し、自らの学びと主体的に推進員養成講座のスタツプに参画するなど、組の要が動き始めたように思えます。

(第19組組長・松山 正澄さん)

教区御遠忌委員会総会を開催

去る10月22日、今年度新たに設置された「大阪教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌委員会」の第1回総会が開催され、83名の出席を得ました。

委員長に小松崇・教区会議長、副委員長

には酒井度・教区門徒会会長と竹内博明・教区会副議長が互選され、続いて「教化事業部会」と「団体参拝部会」委員を互選し、教化事業部会の部長には北畠顯諒氏、副部長には三好泰紹氏が、また団体参拝部会の部長には三牧文弘氏、副部長には内山宗之氏が就任されました。

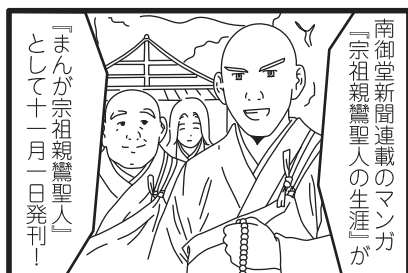
その後、篠原亨栄・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌本部事務局室事務部長から御遠忌基本計画書の内容に関して説明と質疑が行われ、今後の基本計画実施に伴う諸業務の整理・推進のための課題を確認しました。

次回12月2日は、第2回委員会総会として宗務総長の出席を得て(内局巡回)更なる協議を重ね、御遠忌実施計画の策定に向けた取り組みを具体化させてゆく予定をしています。



しゃらりんちゃん

祝！コミック化 編



中国酒家 明元

mingen

そもそも麻婆豆腐は、中国四川省成都が発祥の地である。私も昔、当地で食べる機会を得たが、日本のものとはかなり味が異なる。日本の麻婆豆腐は、ご存じのとおり唐辛子で辛いのであるが、現地のものは唐辛子に、山椒の辛さも加わっている。しかも、激辛。唇がしびれて感覚が無くなってしまふほど山椒辛いのである。日本人はほとんどこの山椒の

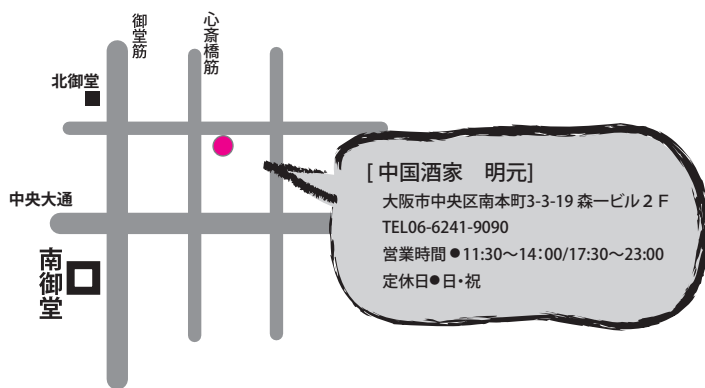


辛さというのを食べつけていないためか、これが効く。たちまち額から汗が噴き出てくる。しかしこれがうまいのであった。

日本ではなかなかこの本場の山椒辛い麻婆豆腐に出会えないと思っていたが、やっと見つけた。それが今回ご紹介する「明元」である。

店の雰囲気は中華料理屋というより、創作和風居酒屋といった感じ。オープンキッチンの前にカウンター席が並び、奥には個室の座敷もある。料理も一品ごとが比較的少量で、少人数で行っても色々楽しめる。そして、味は、本格的な四川料理。お酒もワインから日本酒まで豊富に揃う。まずは「本物の」麻婆豆腐を試していただきたい。そして店のもうひとつのおすすめである「よだれ鳥」を。これは蒸し鶏に辛いゴマだれをかけたもので「よだれが出るほどおいしい」ので「よだれ鳥」だそうである。

この異色の中華料理店で、ぜひ辛さを堪能していただきたい。(澤田)



発行日:2008年11月1日

発行所:真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人:五辻信行

編集: 第4組 常栄寺・久世見証
第9組 淨園寺・難波美千子
第10組 是三寺・北川浩三
第12組 清澤寺・澤田 見
第17組 法観寺・廣瀬 俊
第27組 願隨寺・平野圭晋
第27組 信證寺・吉内利彦
第27組 浄宗寺・畠中晃子

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>

編集後記

最近とても心に響いた言葉があります。◆お世話になつてゐる先輩

の奥さんが言われた言葉なのですが、その方が年齢を聞かれたときにサバをよむことなく自分の年齢を答えられました。へんな質問なのですが「なぜサバをよまなかったのですか?」と聞いてみると、「サバをよむとその分だけ自分を否定しているみたいだから」という答えでした。◆なんて心に響く言葉なのでしょうと思ひました。僕も段々と年齢を言いくくなくなつて思ひましたが、今の自分があるのはそれだけの時間を生きてきたからなのに、良く思われたという勝手な価値観で気付かなくなつていました。◆人との出会い、様々な出来事の尊さを考えさせられました。それらを好きなものだけ選んで嫌いなものを捨てては虚しいだけです。全部ひくるめて今の自分があるのだと感じさせられた言葉でした。(丁)